

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：33918

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13444

研究課題名（和文）大学生における社会的排除/包摂と逆境下成長の過程と要因に関する縦断的研究

研究課題名（英文）Longitudinal study of processes and factors related to exclusion/inclusion and growth through adversity among college students

研究代表者

山崎 喜比古（YAMAZAKI, Yoshihiko）

日本福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：10174666

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：2015年度以降、学生調査を継続実施し、2018年度からは卒業時での調査を実施した。これによって、学生の在学4年間に対して、各年次春と卒業時点の5時点でのパネルデータを構築した。さらに、多大学間比較に向け、福祉系6大学での共同研究体制が整った。個別学生の縦断追跡データによる解析では、サークル参加状況とストレス対処力、うつ・不安感との関連性や主観的ソーシャル・キャピタルが心理的ディストレスに与える影響、さらには、大学生が経験する大変な出来事の内容や、その「大変さ感」、「対応できた感」などから、どのような逆境経験が大学生を成長させるのか等について分析が進められ、今後も継続して取組まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義や社会的意義については、以下の3点である。第1は、これまで社会福祉学研究が手薄であった青年期の大学生を対象に行われるストレス関連成長や社会的排除/包摂の枠組みでの研究である点である。第2は、学生の在学4年間を、各年次春と卒業時点の5時点でパネルデータを構築したことであり、さらに、福祉系6大学による多大学間比較に関する研究体制も整えた点である。第3は、ストレス関連成長や社会的排除/包摂過程における因果的関連性の探索・解明が可能であり、さらに、社会的排除の防止要因のみならず、社会的包摂や逆境下成長の促進要因も体系的な究明を目指している点である。

研究成果の概要（英文）：Student surveys were continually conducted from the 2015 school year, and graduation surveys with common items included from the 2018 school year. The results of these surveys were used to construct panel data for each spring in the students' four-year period at the university and also at graduation, a total of five points in time. In addition, a collaborative research system was developed to compare six different social welfare universities. Analysis of longitudinal tracking data for individual students showed an association between club activity participation and ability to cope with stress as well as depression and anxiety. Subjective social capital was also shown to affect psychological distress. In addition, factors such as the content, "sense of difficulty," and "sense of coping" for the difficult events students faced are currently being used for analysis related to what kind of adversity experiences help college students grow, and these efforts are ongoing.

研究分野：健康社会学、健康教育学、予防福祉学

キーワード：社会教育・実習 Sense of Coherence 不安・抑うつ アイデンティティ 逆境下成長 主観的ソーシャル・キャピタル Institutional research 縦断研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1 研究開始当初の背景

高度に発展した先進諸国においても、社会的不平等や社会的格差は、経済的困窮に限らず、社会関係にある困窮をはじめ人生の諸側面・諸過程にまで及び、かつ、困窮層は近年ますます増える傾向にあるとされている。従来の貧困防止の網から落ちてくる人々を生み出す社会的過程と要因は、近年、社会的排除／包摂と逆境下成長という概念から、予防的、建設的で包括的かつ詳細な究明が目指され研究されるようになってきている。そうした観点からの研究は、これまで社会福祉が主に取り扱ってきた高齢者や子ども、障がい者といった枠を超えて稼働年齢層の男女まで取り上げられるようになってきたものの、青年層、中でもわが国では同年代層の42%にも及ぶ大学生に関して、少数事例報告はあっても、法則性の発見につながるような量的調査研究は、国内外とも皆無に等しい。本研究は、こうした研究の状況に鑑み、従来からIR (Institutional Research) の一環として行われてきた調査研究の成果を踏まえ、発展させたものである。

2 研究の目的

本研究では、段階的な社会参与の過程にある大学生の学習及び成長プロセスを社会的排除／包摂のプロセスとしても捉え、そのプロセス、また特には逆境下成長や社会的包摂享受のプロセスと、well-being や sense of coherence (首尾一貫感覚、SOC) 等の内的資源、ソーシャル・キャピタル等の外的資源、並びに大学が提供する学習機会等フォーマルな社会的環境的資源との因果的な関連性について、縦断調査データを用いて実証・究明することを目的とする。対象は1大学より始めるが、当該大学の中長期の追跡調査を可能にする体制の構築が、また比較目的から多大学の参加が目指される。

3 研究の方法

本研究プロジェクトにおいては、大学生の社会的排除／包摂及び逆境下成長プロセスの解明をめざし、主に下記の取組を行った。

- (1) 社会的排除／包摂及び逆境下成長に関わる学生調査の実施
- (2) 大学保有データとの突き合せを含めた縦断調査・分析フレームワークの構築
- (3) 学生支援策の立案と実施、効果測定による基礎的知見の収集
- (4) 卒業後の学生を対象とした長期的追跡調査の実施

4 研究成果

(1) 社会的排除／包摂及び逆境下成長に関わる学生調査の実施

本調査については、科研期間の前年度以降、2015年度～2019年度の各年度の初めに1大学による調査を継続して実施した。さらに、2018年度からは従来の年度初めに実施する調査項目を含む卒業時点における学生調査を実施した。これによって、入学時点から4年間(各年次春)と卒業時点での調査を合わせた5時点により、学生の在学期間全体にわたるパネルデータを構築し、在学中の学生の変化の把握と2015年度と2016年度入学学生の4年間の変化を比較することが可能となった。

多大学で学生調査を実施し比較を行う等、多大学間比較共同研究については、全国の福祉系6大学において学生調査結果を共有し、共通設問の比較を行った。これにより、共同研究体制の基盤が整い、今後においては、共通設問を増やす等、共同研究へと発展させる計画である。

卒業後の学生を対象とした長期的な追跡調査については、調査主体間の調整を行ったが、具体的に共通設問を追加する等、調査の実施は実現できなかった。今後、さらに、調整を行い、卒業後を含めたパネルデータ構築に向けて取組む計画である。

(2) 個別学生の縦断追跡や解析結果の報告

～大学生の社会的排除／包摂及び逆境下成長プロセスの解明に向けて～

本研究プロジェクトでは、大学生の社会的排除／包摂及び逆境下成長プロセスの解明に向け、個別学生の縦断追跡データによる解析を実施してきた。以下に、3つの研究成果を報告する。

1) スポーツ系の部・サークル活動参加とストレス対処力、うつ・不安感の縦断研究

本研究では、大学生における部・サークル活動への参加状況と、ストレス対処力、うつ・不安感との縦断的関連性を明らかにする。ある大学の2年次進級時の全学生を対象とし、部・サークル活動への参加状況ならびにストレス対処力 (sense of coherence; SOC) やうつ・不安感 (K6) を調査し、3,4年次進級時にかけて追跡調査を実施した。男280名、女360名を、スポーツ系継続 (112名)、スポーツ系中断 (74名)、文化・ボランティア系継続 (106名)、無所属継続 (167名)、その他 (181名) の5群に分けた。繰り返しのある2要因分散分析 (5群×3時点) を線型混合モデルにより実施した。

① サークル参加状況とストレス対処力の推移

ストレス対処力の評価として、首尾一貫感覚 (SOC) 尺度の日本語版を用いた。点数が高いほどストレス対処力が高いことを意味する。

主な結果は以下の2点であった。

- ・有意な交互作用は見られず、各群のストレス対処力得点の変化の仕方に違いは無かった。
- ・スポーツ系継続群は、無所属群やその他群よりもストレス対処力が高いまま推移したことであった。

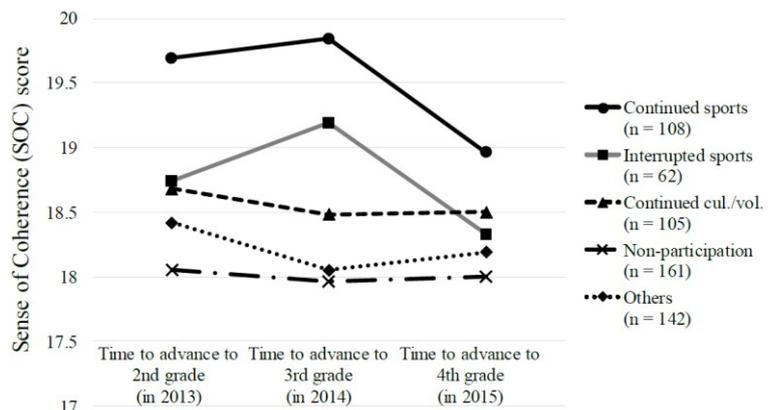


図 1.1 サークル参加状況別の SOC 平均得点の推移

② サークル参加状況とうつ・不安感の推移

うつ・不安感の評価には K6 日本語版を用いた。点数が高いほど、うつ傾向や不安感が強いことを意味する。

主な結果は以下のとおりである。有意な交互作用は見られず、各群のうつ・不安感得点の変化の仕方に違いは無かった。また、スポーツ系継続群は無所属群よりも、うつ傾向や不安感が軽度な状態で推移した。

さらに、全体的に、4年次ではうつ傾向や不安感が強まった。

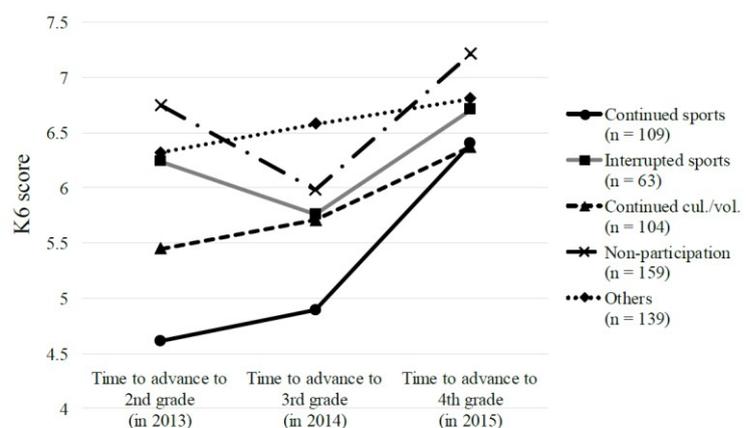


図 1.2 サークル参加状況別の K6 平均得点の推移

2) 学生の主観的ソーシャル・キャピタルが心理的ディストレスにあたる影響及び源泉の検討

本研究では、以下の4点について確認・検討を行った。

- ・新1年次から新4年次にかけての心理的ディストレスの変化を確認する。
- ・心理的ディストレスの変化率と初期値の存在の可能性を検討する。
- ・主観的ソーシャル・キャピタルの変化率等が心理的ディストレスの変化率に与える影響のパス、および主観的ソーシャル・キャピタルの変化について複数の潜在的パターンを仮定したモデルについて検討する。
- ・主観的ソーシャル・キャピタルの変化と参加している部活動・サークル種類の関連を検討する。

① 心理的ディストレスの変化

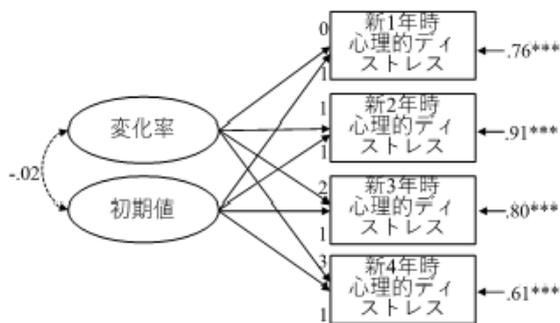
心理的ディストレスは、学生全体として新1年次から新4年次にかけて増加傾向にある。

② 心理的ディストレスの変化率と初期値の存在の可能性検討

心理的ディストレスの変化率と初期値の存在の可能性について検討するため、変化率と初期値およびそれぞれの全体の平均と個人間の分散の存在を仮定したLCMを行った(図1.1)。

そうしたところ、モデルの適合度は十分であり、変化率の平均値(0.65, $p < .001$)と分散(0.04, $p < .01$)、初期値の平均(1.18, $p < .001$)と分散(0.14, $p < .001$)は有意だった。

以上から、学生の心理的ディストレスは入学してすぐの初期値(初期の状態)と、その後の変化率それぞれが独立して存在すること、そしてそれらには個人差もあることが示唆された。



Loglikelihood=10649.14, $\chi^2(5)=32.02$, RMSEA=.07, CFI=0.95, TLI=0.93, SRMR=.05

Note1. *** $p < .001$

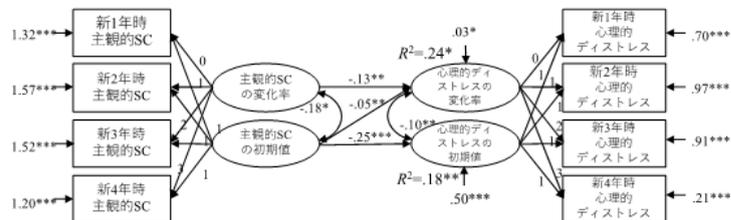
Note2. 点線はパス係数が非有意である

図2.1 学生の心理的ディストレスの潜在曲線モデル ($N=1097$)

③ 主観的ソーシャル・キャピタルの変化率等が心理的ディストレスの変化率にあたる影響

以下に示す図2.2のモデルを作成し検討を行った。まず、主観的SCの変化に4つのパターンがあることを示したモデルのエントロピーは.75で十分であり、3つのパターンを仮定したモデルと4つのそれを比べたヴォン・ロウ・メンデル・ルビン尤度比検定(Loglikelihood=-13141.85)は有意($p < .05$)であり、5つ以上のパターンを仮定したモデルでは非有意となったため、4つのパターンのモデルを用いることとした。

一方、主観的SCの変化率から心理的ディストレスの変化率へのパス(-.13, $p < .01$)、主観的SCの初期値から心理的ディストレスの変化率へのパス(.05, $p < .001$)が有意であり、心理的ディストレスの変化率の決定係数(R^2)は.24($p < .05$)で有意だった。



Note1. Loglikelihood=-13073.85, Entropy=.75, *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Note2. Logits for Classification Probabilities for the Most Likely Latent Class Membership by latent class is 3.70 -5.92だった。

Note3. 推定値はすべて非標準化係数である。

図2.2 学生の主観的SCから心理的ディストレスへの影響の最終モデル ($N=1099$)

以上のことから、主観的SCの変化率と初期値それぞれは心理的ディストレスの変化率に影響することが示唆された。

④ 主観的ソーシャル・キャピタルの変化率パターンと部・サークル活動参加との関連

主観的 SC の変化率のパターンは、高初期値群 (N=647)、高初期値・低(負)変化率群 (N =182)、低初期値・高(正)変化率群 (N =46)、低初期値・低(正)変化率群 (N =224) の4つだった。

4つのパターンと部活動・サークルへの参加度の関連について、特に研究実践・ボランティア系ではパターン間で分散が小さく、スポーツ系ではパターン間で分散が大きかった。

以上より、新1年次から新4年次にかけて主観的 SC が顕著に高くなるパターンの学生は研究実践・ボランティア系の部・サークル活動への参加度が高く、スポーツ系の部・サークル活動への参加度は低いことが示唆された。

3) どのような逆境経験が大学生を成長させるのか

一大学生が経験する「大変な出来事」の大変さ感、対応できた感、内容に着目して一本研究では、大学生の成長感を高めることを目的として以下の分析を行った。

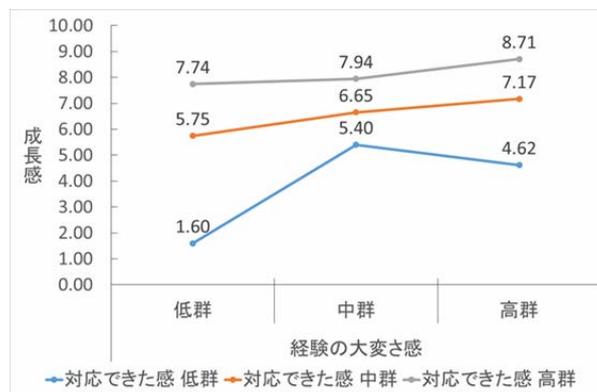
- ・ 経験する出来事の「大変さ感」と「うまく対応できた感」に注目した学生の成長感の検討
- ・ 経験する出来事の内容に着目した学生の成長感の検討

具体的な内容については、この1年間で「最も大変だったこと(出来事・状況など)」を自由記述により聞き、その出来事・経験の「大変さ感」とその経験に対する「うまく対応できた感」、さらに、その逆境と経験を通じての「成長感」について聞いた。

その結果を以下に示す。

① 経験に対して「大変だ」と感じたり、経験に「うまく対応できた」と感じたほど、出来事を通じた成長感を感じていた。

また、経験に対する「大変さ」の感じ方とそれに対する対応の仕方によって、成長感は異なり、「うまく対応できている」学生は、「大変な」経験ほど成長できるが、「うまく対応できない」学生は、中程度に「大変な」経験がより成長につながるということが示唆された。



(図 3.1)

図 3.1 成長感の平均値

② 最も大変だった経験に関する内容で上位を占めるのは、「学業」(授業、実習、テストなど)、「人間関係」(部活・サークル、アルバイトなど)と「生活リズムづくり」(生活習慣に関する行動)であった。成長感について、「実習」、「部活・サークル」、「恋愛」、「大学イベント」、「地域活動」、「アルバイト」を大変だった出来事として経験すると成長感が高かった。一方、「経済的な問題」や「トラブル(交通事故等)」に直面すると成長感が低かった。

以上のように、自習や部活・サークル、恋愛、大学イベント、地域活動、アルバイト等、自ら選択した(希望した)状況での経験は、大変だと感じても、その出来事に向き合い乗り越えることが重要である。

一方、経済的な問題(学費の支払等)やトラブル(交通事故)等、自ら選択できない(起こってしまった)状況に対しては、その経験を乗り越えても成長感を得ることが困難である。

これらについては、その出来事に直面しないで済む予防や支援が必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 辻大士, 笹川修, 中村信次, 小平英志, 近藤克則, 山崎喜比古	4. 巻 19 (1)
2. 論文標題 大学生におけるスポーツ系の部・サークル活動参加とストレス対処力, うつ・不安感の縦断研究: 2年間 (3時点) の追跡調査に基づく分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 運動疫学研究	6. 最初と最後の頁 24-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高村秀史, 中村信次, 笹川修, 野寺綾	4. 巻 第5巻
2. 論文標題 アクセスログデータに基づくオンデマンド学習の実態分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本福祉大学全学教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉浦祐子, 小平英志, 笹川修, 中村信次, 横山由香里, 山崎喜比古
2. 発表標題 どのような逆境経験が大学生を成長させるのか
3. 学会等名 日本青年心理学会第25回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 芳賀道匡, 笹川修, 小平英志, 中村信次, 山崎喜比古, 近藤克則
2. 発表標題 大学2-4年次の精神的健康の低下に対する1年次の主観的ソーシャル・キャピタルの影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉浦祐子,小平英志,笹川修,中村信次,横山由香里,近藤克則,山崎喜比古
2. 発表標題 青年期後期における逆境体験がそれを通じた成長感、アイデンティティに及ぼす影響
3. 学会等名 日本発達心理学会第27回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 野寺綾,小平英志,笹川修,中村信次,近藤克則,山崎喜比古
2. 発表標題 志望順位と入学に対する親の意向が大学コミットメントに及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 芳賀道匡,笹川修,小平英志,中村信次,山崎喜比古,近藤克則
2. 発表標題 学生の主観的ソーシャル・キャピタルと精神的不健康の関連
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野寺綾
2. 発表標題 今朝、何食べた？ 朝食の摂取が大学生の学業成績に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会題0回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小平 英志 (KODAIRA Hideshi) (00442228)	日本福祉大学・子ども発達学部・教授 (33918)	
研究分担者	横山 由香里 (YOKOYAMA Yukari) (40632633)	日本福祉大学・社会福祉学部・准教授 (33918)	
研究分担者	野寺 綾 (NODERA Aya) (50709748)	奈良県立大学・地域創造学部・准教授 (24602)	
研究分担者	辻 大士 (TSUJI Taishi) (90741976)	千葉大学・予防医学センター・特任助教 (12501)	